

グローバル通信

2009 vol.12

Ryukoku University
GLOCAL TSUSHIN

修士論文の提出も無事終了し、2008年度スケジュールも終わりに近づきました。院生の皆さん、とりわけ修士論文を提出された皆さんには「振り返ればあっという間の一年」といった心境でしょうか。

今号は、秋から冬にかけてのキャンパス内外での活動と修士論文関連の記事でまとめました。また、すっかり定着してきたインターンシップ、恒例となった院生自主シンポジウムの様子も報告することができました。

この自主シンポジウムに併せて開かれたOB・OGネットワークの報告にもご注目下さい。これらの活動から、本コースを舞台に着実に地域公共人材のネットワークが広がってきていることが実感できます。（編集部）

市民協働により、ふるさと力の向上を!	1
三重ダルクの今後の10年	1
京都から発信する都市政策	2
自治体インターンシップ報告	2
院生自主シンポジウム「地域デモクラシーと議会改革」	2
修士論文「今年もがんばりました」	3
単位早期履修制度を利用して	4
報告 地域協働トライアル 京都中部	4
コース生が新聞に取り上げられました	4
事務局インフォメーション	4



市民協働により、ふるさと力の向上を!

栗山 正 (亀岡市長)

昨夏来、未曾有の不景気の風が吹き荒れ、将来への不安感、閉塞感が高まる中であって、市民生活に最も近い地方行政への期待と要望は増幅しています。しかし、地方行政の実態は、財政危機と分権社会の進展も絡まって極めて深刻な事態にあり、行政サービスの維持、向上が喫緊の課題となってきています。

そうした環境下にあっても、先人の尊い知恵と努力を忘れることなく、平和で未来に夢を描ける「安全・安心なまちづくり」を市民協働で進めることをポリシーにして、現在、「新総合計画=夢ビジョン」の策定を進めています。

「安全・安心は、最大の福祉」であるとの共通認識の下に、市民が真に支え合える社会の構築、「温もりにぎわい ところ通う 共生のまち」を、セーフコミュニティの理念を取り入れて、市民・大学・企業・行政機関の協働でもって進めています。

事故や外傷の実態を科学的に分析して、セクトにとらわれない連携の力で、コミュニティレベルから予防するというセーフコミュニティの考えは、現在の行政マネジメント全般に求められているプロセスと判断していますが、これを進める上では、大学やNPOの存在が極めて重要となっています。

2002(平成14)年10月、亀岡市と龍谷大学とは「地域人材育成に係る相互協力に関する協定」を締結。爾来、市職員のキャリアアップやインターンシップの受入れなど互恵的連携でもって、分権社会における公共人材育成に努めてきましたが、これからは、単に市職員のクオリティということではなく、市民も含めた公共人材の育成が、地方行政にとって、また、協働まちづくりにおいて不可欠な要素と捉えております。

先月実施しました「地域協働トライアルー京都中部」を地域公共人材の育成に向けた新たなスタートとして、大学との相互協力・連携も高まっていくことに期待しております。



三重ダルクの今後の10年

南川久美子 (NPO法人三重ダルク 理事長)

三重県にダルクが誕生してから10年になります。先日2009年2月11日に三重県庁講堂において参加者250人の方と共に、「10周年三重ダルクフォーラム」を開催しました。このフォーラムは、この10年間に變化した点、制度の問題点、支援プロセスにおけるそれぞれの問題点を明らかにしながら、薬物依存症の当事者の立場、ダルクが対応できること、機関やそばにいる者がどのような支援を必要としているのかを振り返りました。日本ダルクの会長の近藤恒夫氏は、インクルージョンの社会を目指す支援、社会に誰もが溶け込みながら、その個々の個性を生かしながら包み込んでしまう社会を作ることが大切と話されました。これからの三重という地域で、ダルクという活動が、薬物依存症のみなさんが、人生の再チャレンジを繰り返しながらも自分らしく生きていける地域を創っていくことが、今後の10年に課せられた課題ではないかと私は思います。

「なぜ、わたしたちはダルクにいるのか」という書籍の裏表紙に、

『神様、私にお与え下さい。

自分に変えられないものを 受け入れる落着きを!

変えられるものは、変えていく勇気を!

そして2つのものを 見合わせる賢さを!』

と書かれています。この言葉は、ダルクのミーティングでも必ず登場する魔法の言葉です。私は、この言葉に刺激され、ダルクの成長の可能性を確かめてみたいと思います。現在、三重ダルクは県のこころの健康センターと共に依存症の理解を広める研修を県内数カ所にて行い、刑務所や、精神科病院との連携など幅広く活動しています。定期的集まる三重ダルクの運営委員会では、家族相談や広報、助成金事業の企画などを行っています。でもまだまだ輪が大きく広がったとは言えません。龍谷大学NPO・地方行政研究コースとおして、三重という地域で、ダルクだけに依存者への対応を依存することなく、地域が依存症の理解を深め、個性のあるいろいろな人々が一緒に地域を創っていくヒントを見つけてほしいと思います。地域もダルクも成長していく仕掛けが大切で、ぜひこの研究にて次の10年の歩みを創ってください。

京都から発信する都市政策



「政策系大学・大学院研究交流大会 —京都から発信する都市政策—」は大学コンソーシアム京都が主催する、学生や大学院生が主役の大会です。この大会は「京都における政策系大学・大学院の学生が一堂に会し、日頃の研究成果を発表・発信することで、研究を深化させるとともに、広範な研究交流を図ることを目的として」開催されています。

2005年度より開催されているこの大会は、今回で4回目となり、発表内容も次第に練り上げられたものとなってきています。また毎年12月に開催されるということが、学会などで発表の機会の少ない学生や大学院生にとっても目標となっており、京都における研究活動が活発化している大きな力になってきているということが伺えます。

発表は口頭発表とパネル発表に分かれており、口頭発表では「環境・観光」「行政・教育」「市民参加・国際」「地域連携・地域活性化」「まちづくり・都市計画」「労働・経済」「ジェンダー・少子高齢化」という7つの分科会に分かれて発表が行われ、47組の学生が参加しました。パネル発表には16組の学生が参加し、パネルの前で来訪者や審査員の質問に答えました。

本コースからは鳥居良寛さんが参加し、日頃の研究成果を発表されました。鳥居さんは環境をテーマとして、地域にある再生可能エネルギーの利用を促進するために、環境NPOの取り組みを行政が評価することが「協働」の手法となりうるのではないかと政策提言を行いました。他にも本大学の学生も参加し、非常に活発な研究発表が行われました。



自治体インターンシップ報告

亀岡市へ

橋詰清一郎 (法学研究科1回生)

私は2008年7月下旬から11月の間、亀岡市企画管理部企画課で大学院の長期インターンシップを通じて、政策スタッフとして「セーフコミュニティ」担当部署で多くの経験・体験する機会をいただきました。「セーフコミュニティ」とは外傷はすべて予防できるものとして、総合的、科学的にアプローチしていくというもので、WHOから日本で初めて亀岡市が認証を受けている先進的取り組みです。

市役所内のみならず、地域でのワークショップやヒアリングに参加し、ともに考え、行動していく、とても住民とも近く、さまざまな関係部署と協力により、安全で安心な地域づくりを行っているものでした。

特に企画から携わらせていただいた「篠町安全・地域魅力マップ(S-MAP)」防犯、防災のみならず、地域活動としても充実したものとなったと感じられました。

私を深く温かく迎え入れ、貴重な体験をさせていただきました。市職員さんのみならずこの機会に縁をあったすべての人たちに感謝でいっぱいです。自分にとって財産として心に深く刻んでいきたいです。

高島市へ

鳥居良寛 (法学研究科1回生)

私は今年度滋賀県高島市の企画部自治協働課でインターンシップをさせて頂きました。

主な内容としては、市民協働交流センターの設置に向けて設置された準備委員会に事務局のスタッフとしての実践になりました。

この準備委員会は増加しつつあるNPOや市民活動団体を支援するために、どのような形、体制でセンターを設立し、運営することが望ましいのかを考えるために設置されたものです。

この準備委員会には様々な立場の市民の方々が参加しておられ、こうした委員の方々の多様な意見に触れる中で、市民社会の時代に行政による支援の手法はどうあるべきなのか、ということについて常に考えていました。また、本来、「協働」というものはどうあるべきか」という協働論の根本的な問いに対しても考える非常に良い機会になりました。

1年間でしたがお世話になった自治協働課をはじめ、温かく迎え入れてくれた市民の方々には感謝の想いでいっぱいです。ありがとうございました。

院生自主シンポジウム「地域デモクラシーと議会改革」

2009年2月14日、龍谷大学深草キャンパスにおいて『地域デモクラシーと議会改革』と題したシンポジウムを開催しました。毎年、恒例になりつつある院生の自主企画シンポジウムですが、今年度は『議会』をテーマに選びました。その理由として、私が議会を研究していること、栗山町の議会基本条例を始めとして全国で議会改革が取り組まれていることもあり、今一度、地域のデモクラシーを担う議会を変えていく意味を再検討し、議会改革の必要性を共有できればと選んだ次第です。

シンポジウムの第1部は『自律自治体の形成と議会改革』をサブテーマに、議員・首長を経験された前多治見市長の西寺雅也氏から自律をキーワードに多治見で取り組まれた改革と議会に対するいくつかの問題提起を語っていただきました。第2部は『議員発・議会改革のシナリオ』をサブテーマに、現職の議員3名を招聘して、西寺氏からの問題提起に対する回答と、自身が出来る現実的な議会改革のシナリオを語っていただきました。



シンポジウムを開催するにあたり私が重要視したのは招聘する議員の方です。今回、年齢は30代から50代と幅広く、経歴・性別もバラバラな方々をお呼びしました。というのも、本来議会は多種多様な人々から構成されるべきあり、平均年齢も高く、職業も偏り、しがらみや利益誘導型のような従来の議会

構成で本当に改革ができるのかという思いがありました。シンポジウムの中でも従来型の議会に苦しみ、改革が進まないといったお話を伺う場面がありました。しかし、そうであっても議会を変えていくこととするゲストの方たちの新しい意見や思考が今後、議会の在り方を大きく改革していくものであると私自身は実感しました。

シンポジウム終了後は昨年設立したOB/OGネットワーク交流会を開催し、修了生・現役生・更にゲストの方たちが参加され新しい交流の輪が広がりました。

(朝倉 健太 法学研究科)

OB会活動報告

栗田 豊一 (2007年度修了生 東近江市役所)

NPO・地方行政研究コースは、地域の人材が大学院で学び、大学院から地域公共人材として地域へ戻っていきます。

昨年、今までの卒業生が地域社会で相互連携できる人的ネットワークを構築しようと「OB/OGネットワーク」を立ち上げました。主な活動は、人的ネットワークを構築するための同窓会名簿の配布と年に1回の交流の場の提供です。

今年も2月14日に自主シンポジウムが開催され、2003年度から2008年度の卒業生が一堂に会し、各年度の卒業生がステージに上がり、その後の取り組みや近況を報告しました。

OB/OGネットワークは、年を重ねるごとに新たなメンバーが加わり、ネットワークが拡大してゆきます。あなたもこの輪の中にぜひ参加してください。

修士論文「今年もがんばりました」

法学研究科は1月20日、経済学研究科は1月23日が提出の締め切りでした。

仕事と学業を見事に両立された社会人院生の皆さん。2年間社会人の方々と一緒に学ばれた若き院生の皆さん、本当にお疲れさまでした。修論を脱稿した直後の皆さんの声を集めました。今年も例年同様、多彩なテーマの修論が出揃いました。参考のため、昨年(2007年度)の論文提出者と題目の一覧を掲載しておきます。

(1) 修士論文を書き終えた今の感想は

◆夢から醒めて内容は覚えていないのに「なんか怖い夢みたなあ」という記憶となぜか名残惜しいような余韻が残っている朝のような気分。◆「もっと書きたい」と「もう書きたくない」が自分の中で言い争っている感じ。◆先生に多大なるご迷惑をおかけし、申し訳ない気持ちでいっぱいです。今後は先生のご指導を無駄にしないためにも、もう一本書いてみたいと思います。◆満足感というよりはとりあえず期間内でできる限りのことはやったという感じ。言いたいことを全て言い切ったわけではないですが提出当日の昼食中に決めゼリフを思いついたときはスッキリしました。◆とにかくホッとしました。目がしょしょよしています。◆大変でした。いつの間にか正月も過ぎていた。

(2) 修士論文作成でいちばん苦勞されたことは

◆文系論文は理系のそれと違い言葉だけで語らないといけないということ。雑多に組み合わせられている事象をすべて日本語に落としこみ、理論的に組上げるのは思いの外、大変でした。◆論証とまとめの部分が難しかったです。◆集中するための動機、時間、方法論、体力、書く力が不足していた。◆土壇場になっても筆が進まないこと。◆構想が膨れ上がりすぎ、テーマを絞り込むこと。◆気持ちと経験で多くのネタは浮かんでいますが、その根拠確認が大変でした。

(3) NPO・地方行政研究コースに入ってよかったことは何ですか

◆経験豊かな先生方と本質的な議論ができたことが刺激的だった。行政の最前線に立つ社会人院生や若手院生と夜遅くまで議論を戦わせることができたことが印象的。普段は現実には妥協しがちだが、大学院ではとことん議論ができ、良かった。◆自分の仕事を客観的に見られるようになったこと、周りに刺激され、まだまだ勉強したいと思うようになったこと。◆素晴らしい先生と院生との出会い。授業後の延長戦は大学院に通う楽しみでした。◆「思い」を持った先生方、院生との出会い。少し自分を耕せた気がする。◆すべてが新鮮だった。院生と先生の強いつながりは素晴らしい。

(4) 論文を書き終わってのNPO・地方行政研究コースに対するご意見は

◆「学びたい」と思ったときにジャストタイミングで私の前に現れたのがこのコースでした。授業も行事も非常に濃く、薄っぺらな事がもてはやされる近頃、このディープさは貴重だと感じました。◆本当に有意義なコースなので修士生が「地域公共人材」として活躍できるような仕組みが作られればさらにいいと思う。◆NPOや学生、行政職員など立場の異なる意見が同時に聞けたり、先進的なまちづくりの事例にふれたりすることで、自分に欠けていた視点や発想に気づくことができた。◆実務経験豊富な社会人院生とフレッシュな院生と一緒に学ぶことができるのは非常に良い。外部講師の招聘も大きな魅力でした。

昨年度(2007年度)の卒業生 修士論文一覧

研究科	氏名	タイトル
法学研究科	岡田真由美	住民自治を培う、人材のネットワーク形成について -一枚方テーゼの歴史的検証を通して-
法学研究科	栗田 豊一	地域福祉のあり方と自治体組織の体制 -合併後を契機とした東近江市の事例から-
法学研究科	櫻井あかね	行政とNPOによる事業連携の変容 -公・共・私型社会への変革-
法学研究科	太平 満恵	介護・家事労働を担う外国人労働者の権利保障 -社会権からのアプローチ-
法学研究科	中村晋一郎	介護保険市場における営利法人についての考察 -地域型福祉構築の可能性と問題点-
法学研究科	丸山 雅史	発達障害者支援法の現状と課題 -発達障害の定義を通して-
法学研究科	藪 有理子	日本のワーク・ライフ・バランス推進における課題 -正規労働者と非正規労働者の均等待遇を目指して-
法学研究科	大和 誠	市街化区域内農地活用の研究 -大阪府守口市を事例として-
経済学研究科	木田 学	人口流出都市における、公平性と受益と負担を担保する都市税制 -人口流入都市と流出都市比較による都市税制基礎分析-
経済学研究科	田中 泰信	土地利用の歴史的経緯から見る景観破壊のメカニズム -伏見区深草大岩地域の土地利用の変遷-
経済学研究科	西川 嘉邦	甲賀市産業連関表による産業構造の析出 -平成12年(2000年)定量分析による政策立案の可能性-

口頭試問に向けて

■ 修士論文の口述審査に臨むみなさんへ

岡田真由美(2007年度修士生 枚方市教育委員会)

私も昨年、口述審査を受けましたが、やはり事前に指導教官に審査の流れについてお聞きしておく方がよいと思います。自分に与えられる時間はどれくらいで、副査、主査の先生が質問されるのはどれくらいの時間なのか。また、中間発表で指摘された部分は必ず、どのように研究を深めたかについて訊ねられますので、考えをまとめておく必要があります。

私の場合、あのような場合は無い上がらってしまうので、論文要旨以外に事前に読み原稿を作りました。そこには「なぜ、この論文テーマにしたのか」、そして章ごとについて論じたかったことを説明し、まとめとして「自分が設定したテーマについて、どのような結論が出たのか」などについて書いておきました。そしてそれを自分自身で、声に出して何回か説明してみました。声に出すとおかしな箇所が見つかったり、足りない部分がよくわかります。家族や友人に聞いてもらうのもいい方法ではないでしょうか(家族、友人には迷惑なことですが、何回もある訳ではありませんので勘弁してもらってください)。

口述審査は、やはり評価のための試験ですから厳しい面もありますが、私はそこで指摘されたことや、こんな解釈もあるがどう思うかなど、新たな課題を提供していただく場ともなりました。その時に先生方からいわれたことは、私がこれからも研究

してみたいテーマで、「面白い講義」のような時間だったように、今は感じています。みなさんのご健闘をお祈りしております。

■ 私の口頭試問

田中 泰信(2007年修士生 京都市役所)

試問対策のために、提出の翌日からメモ作りなど結構準備しましたが、結局即座に出てくる記憶しか役に立ちませんでした。私の場合は、論文の間口を広げ過ぎたために、指導教官に大変迷惑をお掛けしたと思います。今になって「針の穴を通すような論文」とは当を得たアドバイスであると思っています。

経済研究学科の論文の審査は主査1名、副査2名で行われます。自分の思考が停滞した箇所は、見逃さないで指摘されます。論ずるということの意味が少し理解できました。

試問の時間は、約30分間と聞かされていました。私の場合は、記憶が正しければ約1時間30分、2月の寒空にビショリ汗を掻かして貰いました。丁度一年前のことですが、情景が鮮やかに蘇ります。

「景観の維持も破壊も、人為と自然環境に内在している。」が論文のテーマでありました。景観の維持への合意形成過程の把握が、今後の研究課題であります。

修士論文指導の講評

～次年度以降の院生に向けた論文執筆のアドバイス～

広原 盛明(法学部教授)

NPO・地方行政コースの社会人大学院生の論文指導には、これまでにない特徴と困難がある。まず具体的問題として、1年間という執筆期間の短さと、現職の社会人であるがゆえの日常的業務と並行しながらの執筆という時間的制約が大きなハードルとして立ち塞がる。次に基本的な問題点として、日常の実務的体験の上に形成される膨大な個別知識の「海」のなかで、これらを研究テーマとしてどのようにまとめていくかという体系的な思考の不慣れさがある。

このような条件のもとで社会人院生の陥りやすい傾向に、次のような2つの落とし穴を指摘できる。第1は、テーマに関係する基礎的な文献を読み始めると、その

学問的な深みに嵌まってしまって「元に戻って来られなくなる」こと。第2は、実務上の膨大な知識のなかでテーマの方向性を見失って「溺れてしまう」ことである。だから論文指導の要点は、出発点のテーマに連れ戻すこと、膨大な情報の海から必要な情報の船に救い上げることが中心になる。

このような落とし穴に嵌まらないためには、たとえどれほど稚拙であっても自分かどのような論文を書きたいか、どんなテーマをどのような筋書きで展開しようとするのかについて、スタート地点でまず「短い台本」(シナリオ)を書くことが必要だ。自分の台本がないと、指導教授の片言隻句に右往左往することになる。また研究が進むにつれて、最初の台本がどのように進化したかがわからなくなる。

でもこのことが一番難しい。それが論文作成の礎石を据え付けることであり、自分のオリジナルな思考体系を育てていく原点であるからだ。

単位早期履修制度を利用して

学生生活最後の年に

塩田 健悟 (法学部4回生)

科目履修制度が始まった時の気持ちを一言で言うなら「二律背反」だと思います。社会人の方や大学院生の人に自分の意見を素直にぶつけられる楽しさと、それが故にきちんとした知識がないと意見を言えないという不安の間でもがいていたように思います。

しかし、大学院の授業では先生方や院生の方が学生である私の意見にきちんと耳を傾けて頂き、そのような環境に身を置くことで、より授業に積極的に参加できるようになりました。

科目履修制度の1年目ということ、前例がなく私自身手探りの1年で、大変ではなかったと言えば嘘になりますが、制度を終えてみて本当に履修して良かったと思っています。

大学4年生という自らの進路が決まるとしての目標を失いがちですが、この制度を履修したことで様々な目標や課題に出会うことができました。

来年度以降もこの制度を利用してくれる学生が増えることを望みます。

自己の欠点と自己の可能性

船越亜里沙 (法学部4回生)

昨年4月、学部で環境問題を学んでいた私は環境政策に興味を持つと同時に本コースを知り、制度を選択しました。学部とは異なる深い講義内容や少人数制の講義形式に戸惑いながらも先生方や院生の方のご指導により、この学習環境に慣れていくことができました。

学部で講義室だけの講義形式に慣れていたため、インターンシップや講演会などの総合的に学べる学習機会は充実したものと、また、その中で出会う多くの方のご意見はとても刺激を受けました。特に、インターンシップは実社会の課題に直接触れることができ、良い機会となりました。

大学4回生という時期に制度を活用して、私は自分に足りない知識や能力とともに学ぶことの楽しさを改めて気づかされ、目標をもつことができました。

学習機会は様々な場所がありますが、多くの方にこの制度を活用して頂き、大学院という場所で私のように新たな自己発見をして頂きたいです。

報告／地域協働トライアル 京都中部

Report

龍谷大学大学院NPO・地方行政研究コースでは、龍谷大の学生を含む、丹波二市一町(亀岡市、南丹市、京丹波町)の自治体職員や住民が意見を出し合い、「協働」の仕組みを構築することを目的とした協働型研修「地域協働トライアル 京都中部」を1月23、24日の2日間にわたって開催しました。

同研修は本コースをはじめとし、二市一町などで行う実行委員会の主催により、南丹市国際交流会館で実施されたもので、住民と自治体職員、本学の学生ら約70人が参加しました。そして、計約10時間のワークショップで「協働と連携による地域づくり」をメインテーマに意見を交わしました。

参加した方々からは「同じ中部地域といえども、地域性の違う中で、それぞれの『協働』の考え方を理解し、『気づき』を得たうえで、町づくりを進めていきたい」「自治体間の交流をとおして、中部地区としての連携が深まる場になれば」などの期待が寄せられました。

また、他市、他地域の方と議論することで得られるものとして「一つの議題に対して、地域差、温度差を感じました」「机上の空論から現実的な行動に移ることが大切であると確信した」などの声が寄せられ、協働型研修を実施すること

の意義を確認していただいたようです。

さらに、具体的な課題意識として「地域性を生かした産業、農業、特産物などの特色を生かし、人口を増やすことが大切である」「雇用を増やすことにより、人を集めること、そして人づくりを進めることが大切」などがあげられました。

本学の学生からは「各班とも、人口流出と雇用の喪失が課題になっていたようで、どちらも非常に深刻な問題であることを痛感しました」など、現場の課題を真摯に受けとめるとともに、地域公共人材として担っていくべき役割の重要性を実感したようです。

1日目の研修会終了後には実行委員や関係者、本学の学生が集う懇親会に南丹市佐々木市長もかけつけ、終始和やかな雰囲気の中で親睦が深められました。

(西原 京春 大学院GP RA)



コース生が新聞に取り上げられました

2009年1月19日付の京都新聞に社会人院生の特集が生まれ、その中で本コースの矢杉直也さんが紹介されました。

矢杉さんは市役所で勤務する傍らで、「ブログ・ミーツ・カンパニー」というNPO活動も併行させ、今年度の協定先団体の市役所から経済学研究科の社会人院生として入学されました。

大学院での1年という生活を振り返り、矢杉さんに研究と修士論文作成についてお話を伺ったところ「大学院へ行くことを決意した自分自身との約束を果たすために、あらゆる言い訳を封印するとなんとかできるものです。様々な講義で社会の課題に向き合い、懸命に考え、議論することを通して、『論』という道具が少し身についたような気がします」と論文作成過程を振り返っておられました。

さらに「それでもまだまだです。ここまでは論文をつくるためのプロセスを知っただけで、社会的に意味のある活動であるとは到底いえません。今年からはその道具を磨いて、少しでもいいものをつくっていきたいと思っています」という「社会変革」に向けた力強いメッセージも頂きました。

本コースは若手院生と社会人院生がそれぞれに影響し合うことで、より良い効果をもたらすことを目標として設置されました。社会人院生は1年、若手院生は2年の学びを糧に社会を「変革」する地域公共人材として活躍することを願っています。「ブログ・ミーツ・カンパニー」<http://www.blog-meets.com/>



事務局インフォメーション

2007年度の公開講演会(「地域リーダーシップ研究」「先進的地域政策研究」と院生自主シンポジウムの記録をまとめた論集「分権型社会を拓く自治体の試みとNPOの多様な挑戦—地域社会のリーダーたちの実践とその成果—」第5号が完成しました。

ご希望の方は、龍谷大学教育学部NPO・地方行政研究コース事務局075-645-7891 までご連絡下さい。

NPO・地方行政研究コース ニュースレター『グローバル通信』通巻12号 2009年2月

発行/龍谷大学大学院NPO・地方行政研究コース
連絡先/教育学部(深草)
TEL: 075-645-7891 FAX: 075-643-5021

H P/http://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/
編集/大矢野修、松浦さと子、土山希美枝(編集補助)藍澤ゆかり、西原京春、定松功、朝倉健太、鳥居良寛
印刷/株式会社 田中プリント